

日本語に思う「国際化」

石戸 光

「文明の衝突」という言葉すら聞く昨今、日本を取り巻く国際環境は大きく変動している。しかし日本においては、この激動の国際社会を尻目に全く変化しない部分がある。多くの日本人が一般に持つ（と思われる）「国際化」観である。ある日私は海外現地調査に向かう飛行機の中で、隣り合わせたグループ旅行の日本人のおばさま方の会話を聞いていた（というより無理やり聞こえてきた）。「はやく国際化がもっと進んで、どこに行っても日本語が通じるようになってくれないかしらねー」「そーよねー。買い物とか、すごく不便しちゃう。」私は心の中で、人気アニメ「ちびまる子ちゃん」のナレーターさながらつぶやいた。「そんな時代は決して来ない」というのも、多様な価値観の同居する国際社会では、簡潔明快さや他者理解のための自助努力がきつと問われ、残念なことに、我々の日本語が国際社会における共通の土俵とはなりえない気がするのである。

まずもって、日本語の持つ「文のあいまいさ」はよく指摘される。主旨が不明瞭なままでも、文として自信を持って完結させている用法は少なくない。「それじゃ、すみません、今日はちょっとあれですんで」「ちよっと何してきます」（ともに片手

を振り上げるジェスチャーを伴い、またはつきりとは発話しない）といった「あれ」や「何」は指示代名詞であるが、何を意味するのであろうか。明言がはばかられる際に意味内容を暗黙的に聞き手の想像にまかせておき、いざとなったら「あれとはこういう意味」と解釈を差し替えることが可能なのである。このような表現を第二外国語として学ぶのは並大抵のことではなく、また学ぶ必要もないように思われるのである。

また日本語は時にまわりくどい。何かの新聞に載っていたが、政治家言葉はその最たるもので、例えば「私は〇〇と申します」といえば済むことをそう言わずに「君がもし〇〇かと問われましたら、私は決してそれを否定するものではございません」という言い方になってしまいうさうである。

さらに音節の構造からくることであるが、日本語表現は長くなりやすく、概して西欧の歌の日本語訳には原語の意味内容の半分以上しか歌詞に盛り込むことができないようである。「きらきらひかるおそらのほしよ」という童謡はイギリスからのものだが、同じ部分の英語の原詩は「Winkle winkle the star, how I wonder what you are」（直訳すると「きらきら、きらきらと光る小さな星よ、あなたがそんな様子であることに私は

何と驚嘆していることでしょう）であり、同じ音節内に日本語の歌詞より多くの意味内容を表現している。英語は全般に簡潔明瞭、従って共通化しやすい。

日本人の国際化への理解の欠如を指す「まるドメ」という造語を目にした。阿部清司・千葉大学教授の国際化に関する著書にあるものだが、「まるでドメスティック」、つまり日本しか基準として念頭に置いていない姿勢で、「まるでダメ」と一脈通じさせている。その本も指摘するが、要するに「国際化」とは受動的、自動詞的ではなく、「国際化させる」という能動的、他動詞的なものであるべきなのであろう。国際化された社会では生活習慣の違いなど個人のレベルから外交姿勢の齟齬など大きなレベルに至るまで「カルチャー・ショック」も当然起き、私も敬遠したくなるが、「多様性の確保」としてプラスにとらえたいものである。今風に言うところ「まるドメって、ダサーい（古い表現?）」という総論を醸成するために、総論と同時に具体的な国際社会理解のための各論にも取り組むことは、

「超ナウい（これは化石表現?）」と思う。

（いしど ひかり／千葉大学法経学部助教授）